ピロストラトス『テュアナのアポッローニオス』と『イーリアス』[1]

勝又泰洋

序論

ローマ帝政期の著述家ピロストラトス（後 170〜245 頃）の『テュアナのアポッローニオス』は、後 1 世紀のカッパドキアの哲人アポッローニオスの生涯を綴った 8 巻立ての伝記だが、この作品は主人公をめぐる客観的事実をただ羅列しているだけではない[2]。ピロストラトスは、本作のいたるところに先行する文学作品からの引用やこれにたいする引喩を散りばめており、読む者を飽きさせない工夫をしている[3]。この古代ギリシア版の「本歌取り」は、ピロストラトスが生きた（あるいは「創った」と言ったほうが正確かもしれない）第二次ソフィスト思潮[4]の一大特徴のひとつで、彼の同時代人たちも自作のなかで頻繁に同様のことをしている[5]。ピロストラトスは、『テュアナのアポッローニオス』において、想定読者のいわゆる「教養人」（πεπαιδευμένοι）の文学的知識を刺激しようとしているわけだ[6]。

数ある先行文学作品のなかで、第二次ソフィストたちがもっとも好んで取り上げたのが、ホメーロスの二大叙事詩、『イーリアス』と『オデュッセイア』である[7]。ピロスト

---

[1] 本稿は、2023 年 4 月 22 日および 12 月 17 日に開催された京都大学西洋古典研究会例会（前者はオンライン、後者は於京都大学）で発表した内容に改変を加えたものである。当日にコメントをくださった参加者の方々にここで謝意を申し述べたい。

[2] 『テュアナのアポッローニオス』の「伝記」としての特殊性については、Hägg (2012), 319-321 を参照。

[3] Bowie (2009)は、本作における他作品の引用および引喩をリスト化したうえで簡単な解説を付したもので、データ集としてたいへん有益である。

[4] ピロストラトスによる第二次ソフィスト思潮の「創造」については、Eshleman (2012), 125-148 を参照。なお、第二次ソフィスト思潮の優れた概説書として、Whitmarsh (2005)がある。

[5] 例を挙げ出せばきりがないが、たとえばルーキアーノス（後 120〜180 頃）は、叙事詩、抒情詩、喜劇、悲劇、歴史といったジャンルに属する有名な作品（ルーキアーノスから見れば「古典」）をしばしばパロディの対象としている。本稿とも関係の深いルーキアーノスのホメーロス叙事詩の受容については、Bouquiaux-Simon (1968)を参照。

[6] 「教養人」については、Anderson (1989)を参照。

[7] 第二次ソフィスト思潮の作品におけるホメーロス受容については、まず Kindstrand (1973)および Kim (2010)を読まねばならない。これより簡潔だが総合的視点を有したものとして、Anderson (1993), 174-176、Hunter (2004), 249-253、Kim (2022)も合わせ参照すべきだろう。Greensmith (2020)も、クイントス・スミュルナイオス『ホメーロス後日譚』におけるホメーロス叙事詩の扱いにかんして総合的な分析を施している。

ラトスも例外ではなく、『テュアナのアポッローニオス』のなかには、この二大叙事詩の利用の痕跡が数多く見られる。たとえば知恵者オデュッセウスの旅を描く『オデュッセイア』は、本作が「知恵（σοφία）で苦難を乗り越える旅」の物語であることを考える[8]と、相性がいいことは誰の目にも明らかである。じっさい、時おり作中でアポッローニオスはオデュッセウスに重ねられており[9]、『オデュッセイア』は本作の下敷きとして用いられている。両作品のあいだにある文学的貸借関係を細かに分析した Van Dijk は、オデュッセウスを「モデル的旅人」（model traveller）とみなし、これをアポッローニオスの造型に用いるピロストラトスは「間テクスト的パラダイム」（intertextual paradigm）をつくり出していると主張しているが[10]、まさにその通りと思わせるほど、『オデュッセイア』が『テュアナのアポッローニオス』の骨格の形成にもたらした影響は大きい。

しかし、話が『イーリアス』になると、『オデュッセイア』の場合のような構造面での相即関係は見出しがたい。そもそも『テュアナのアポッローニオス』は『イーリアス』のような戦争を描いた作品ではなく、登場する人物も心身両面で優れた偉大な戦士たちというわけではない。たとえば主人公アキッレウスをアポッローニオスと並べて眺めてみたとしても、およそ両人が似ているとは言えない。アポッローニオスは、アキッレウスのように、腕力をふるうこともなければ、「怒り」で冷静さを失うこともない[11]。また、パトロクロスに対応する人物として、ダミスという「友人」（ἑταίρου, 1.19）が一応いるが、ダミスにたいするアポッローニオスの態度および心持ちは、パトロクロスにたいするアキッレウスのそれとはまるで異なる[12]。アポッローニオスの宿敵ドミティアーヌスをヘクトールと重ねることもできなくはないが、このローマ皇帝は、トロイアー第一の英雄が有するような倫理性とは完全に無縁である。

では、ピロストラトスによる『イーリアス』の利用は、第二次ソフィストたちが得意とする、単なる「古典」の知識のひけらかしで、物語の装飾として機能しているに過ぎないのだろうか。筆者は、これはあまりに単純な見方だと考える。たしかに、単なる飾

---

[8] アポッローニオスの「知恵」については、Belloni (1980)を参照。

[9] たとえば 4.36 では、ネローに立ち向かおうとするアポッローニオスがポリュペーモスに対峙するオデュッセウスに比されている。

[10] Van Dijk (2009).

[11] アポッローニオスは、たしかに（たとえばドミティアーヌス帝などと）戦うが、彼の最大の武器は「知恵」である。たとえば、7.34 で、怒り狂ったドミティアーヌスから「誰がお前のことを守るというのだ」と聞かれたアポッローニオスは、「時と、神の霊感と、私が持ちつづけている知恵への愛（Σοφίας ἔρως, ᾗ ξύνειμι）だ」と答える。また、アポッローニオスは怒りの感情（らしきもの）をもっているものの、それは、アキッレウスの場合のように、周囲に破滅的な結果をもたらすような激烈なものではない。たとえば、8.5 で、彼はドミティアーヌスにたいし、「あたかも少年を叱責する（ἐπιπλήττων）かのように」、「口をつつしみなさい（εὐφήμει）」と命令するが、彼の怒りのボルテージは、アキッレウスのそれとは比べ物にならないほど低いだろう。

[12] 「友人」としてのダミスについては、勝又（2023）を参照。

りものとしか思えない使用法もいくつかある。たとえば、7.14 のケースはその好例で、ここでアポッローニオスは、ドミティアーヌスに激しい恐怖心を抱くダミスを勇気づけるための長広舌の最後を、「戦の神は平等なのだ」（ξυνὸς Ἐνυάλιος）という『イーリアス』18.309 の文句で閉じる。アポッローニオスが言いたいのは、単に「（一見不利な）私たちにも勝てるチャンスがある」ということだろうが、ピロストラトスは、彼にわざわざ「古典」由来の派手な言葉遣いをさせているのである[13]。

しかし、筆者の見るところ、この類の『イーリアス』の装飾的な用法はほんの数例に限られていて、物語の本質と結びつく用法のほうがはるかに数が多い。後者の用法のなかで、とくに価値が高いように思われるのが、トロイアーの勇士エウポルボスとギリシアの英傑アキッレウスが取り上げられるシーンである。エウポルボスは、『イーリアス』のなかではかなり地味なキャラクターである[14]が、アポッローニオスの「転生」の思想に深くかかわっているという意味で、けっして無視することはできない。また、アキッレウスのほうは、彼自身が重要であるというよりかは、アポッローニオス同様「知恵」を愛する英雄パラメーデースを復権させるための媒体として機能している、という意味で軽視できない存在になっている。『イーリアス』に登場するこのエウポルボスとアキッレウスは、アポッローニオスの人物像の十全な理解に不可欠な存在なのである。

そこで以下では、エウポルボスとアキッレウスの 2 人が、それぞれ『テュアナのアポッローニオス』においてどのような仕方で描かれているのか分析してみることにする。その作業を通じて、たとえばディオーン・クリューソストモス（後 40/50〜110 頃）の『トロイアー陥落せず』において顕著なように、『オデュッセイア』と並んで『イーリアス』もまた、ピロストラトスの第二次ソフィスト的二次創作の重要な原材料となっていることを明らかにしてみたい[15]。

１．エウポルボスの描写

まずはエウポルボスのほうから見てみよう。この人物は、以下のごとくまずは本作の冒頭部（1.1）で言及される。

---

[13] 他の例として、5.26 を挙げておこう。アポッローニオスは、騎馬戦に興じるアレクサンドリアの者たちを非難するにあたり、『イーリアス』4.451 を引きつつ、アレクサンドリアは「殺す者と殺される者の」うめきと暴力に満ち、「地面には血が流れている」（ὀλλύντων τε καὶ ὀλλυμένων, ῥέει δ' αἵματι γαῖα）と大袈裟な物言いをする。ちなみに、「殺す者と殺される者の」（ὀλλύντων τε καὶ ὀλλυμένων）という表現は、2.22 でも使われている。

[14] 第 16 歌の末尾と第 17 歌の冒頭にほんの少し登場するだけである。彼は、パトロクロスに怪我を負わせたのち、メネラーオスによって殺害される。

[15] Praet, Demoen, and Gyselinck (2011)は、アポッローニオスとドミティアーヌスの対立の描写におけるホメーロス叙事詩（およびエウリーピデース『バッカイ』）の利用法について論じているが、物語の本質の部分に注目するという点で、本論考の試みと通じるところがある。

Οἱ τὸν Σάμιον Πυθαγόραν ἐπαινοῦντες τάδε ἐπ᾽ αὐτῷ φασιν· ὡς Ἴων μὲν οὔπω εἴη, γένοιτο δὲ ἐν Τροίᾳ ποτὲ Εὔφορβος, ἀναβιοίη τε ἀποθανών, ἀποθάνοι δὲ ὡς ᾠδαὶ Ὁμήρου ...

サモスの人ピュータゴラースを称える人たちは彼について以下のように述べている。彼はイオーニアー人などではなく、トロイアーにいたときエウポルボスだった。この人物は、ホメーロスの詩にあるように命を落とすものの、死んだ状態から蘇った……[16]

語り手ピロストラトスは、アポッローニオスが信奉するピュータゴラースの人物像から物語をスタートさせるわけだが、まさにここにエウポルボスの名前が出てくることは見逃せない。ホメーロスの名前も出されているが、これは、この詩人が、『イーリアス』において、トロイアー軍の一員としてのエウポルボスの活躍を描いているからである。この兵士は、まずは「パトロクレイア（パトロクロスの歌）」と通称される第 16 歌の終盤で槍投げの名手として登場し、（ヘクトールの襲撃を受ける直前の）パトロクロスに槍を当て、負傷させる[17]。そして、パトロクロスの死のシーンをはさんで、第 17 歌の冒頭でふたたび脚光を浴びるが、今度は、ギリシアの剛勇メネラーオスと相見え、挑発の言葉もむなしくあっさり殺されてしまう[18]。『イーリアス』のエウポルボスに与えられた複数の特徴のうち、ここでは「命を落とす」という事実だけに焦点が当てられているという点は注目に値する。「死んだ状態から蘇った」という言葉から明らかなように、ピロストラトスが『イーリアス』のエウポルボスを持ち出すのは、この人物がのちにピュータゴラースとして蘇る、というよく知られた話[19]をしたいがためなのである。

エウポルボスの名前が出てくるまた別の記述に目を向けてみよう。それは、ドミティアーヌスにたいするアポッローニオスの長大な自己弁明（8.7）における、ピュータゴラースの説明のなかに見えるものである。

---

[16] 『テュアナのアポッローニオス』のテクストは Boter ed. (2022)を用いる。日本語訳はすべて筆者によるものである。

[17] *Il*. 16.806-817.『イーリアス』のテクストは Monro and Allen eds. (1902)を用いる。日本語訳はすべて筆者によるものである。

[18] *Il*. 17.9-60.

[19] 「ピュータゴラースはエウポルボスの生まれ変わり」というのは、この時代に広く知られていた伝承であったようで（たとえばディオゲネース・ラーエルティオス『著名な哲学者たちの生涯と言葉』8.4、イアンブリコス『ピュータゴラースの生涯』63、テュロスのマクシモス『談論』10.2、オウィディウス『変身物語』15.160-162）、ピロストラトスの発案というわけではない。また、これと合わせて、「アルゴスのヘーラー神殿に奉納されたエウポルボスの楯をピュータゴラースが見た」という伝承もよく知られていたようだが（ディオゲネース・ラーエルティオス『著名な哲学者たちの生涯と言葉』8.5、パウサニアース『ギリシア案内記』2.17.3、ホラーティウス『カルミナ』1.28.9-15）、『テュアナのアポッローニオス』には関連の記述がない。Cf. Burgess (2001), 78.

“γενόμενος γὰρ κατὰ τοὺς χρόνους, οὓς ὑπὲρ τῆς Ἑλένης ἡ Τροία ἐμάχετο, καὶ τῶν τοῦ Πάνθου παίδων κάλλιστος ὢν καὶ κάλλιστα ἐσταλμένος ἀπέθανε μὲν οὕτω νέος, ὡς καὶ Ὁμήρῳ παρασχεῖν θρῆνον· παρελθὼν δ’ εἰς πλείω σώματα κατὰ τὸν Ἀδραστείας θεσμόν, ὃν ψυχὴ ἐναλλάττει, πάλιν ἐπανῆλθεν ἐς ἀνθρώπου εἶδος καὶ Μνησαρχίδῃ ἐτέχθη τῷ Σαμίῳ σοφὸς ἐκ βαρβάρου καὶ Ἴων ἐκ Τρωὸς καὶ οὕτω τι ἀθάνατος, ὡς μηδ’ ὅτι Εὔφορβος ἦν ἐκλελῆσθαι.”

「彼［＝ピュータゴラース］は、トロイアーがヘレネーのために戦っていたときに生きていて、パントオス［＝エウポルボスの父親］の子供のなかでもっとも美しい姿をもち、もっとも美しく武具を身につけていました。彼はあまりに若いときに死んでしまったため、ホメーロスにも嘆きの種を提供したのでした。また、「魂（ψυχὴ）は移動する」というアドラステイアの掟にしたがい、多くの身体を経由したのち、ふたたび人間の姿に戻り、サモス人ムネーサルキデース［＝ピュータゴラースの父親］のもとに生まれ、野蛮な人間から知恵ある人間に、トロイアー人からイオーニアー人になりました。また、なにか不死なる存在であったため、かつてはエウポルボスだったということも忘れられてしまっているのです」

先の例と同様、ここでも、エウポルボスは、ピュータゴラースになる前に『イーリアス』で死を経験させられた人物として紹介されている。先述のように、ホメーロスが描くエウポルボスは戦場で武勇を発揮するわけだが、ピロストラトスのエウポルボスは、このような勇敢な戦士ではなく、あくまで「知恵ある人間・イオーニアー人」のピュータゴラースになる前の「野蛮な人間・トロイアー人」にすぎないのである。一つ、先の例と異なるのは、エウポルボスの死が、魂（ψυχή）の問題と結びつけられている点であるが、これについてはすぐ後でまた掘り下げる。

本作でエウポルボスの名前が出てくるのはもう一箇所あるが、ここでも、ちょうどいま触れた魂（ψυχή）の問題とエウポルボスが直接的に結びつけられている。取り上げたいのは 3.19 のワンシーンで、ここでは、アポッローニオスとインドの賢者団の頭イアルカースが、以下のごとく前世について話をする。

Ἀναλαβὼν οὖν τὴν ἐρώτησιν “περὶ ψυχῆς δὲ” ἔφη “πῶς φρονεῖτε;” “ὥς γε” εἶπεν “Πυθαγόρας μὲν ὑμῖν, ἡμεῖς δὲ Αἰγυπτίοις παρεδώκαμεν.” “εἴποις ἂν οὖν,” ἔφη “καθάπερ ὁ Πυθαγόρας Εὔφορβον ἑαυτὸν ἀπέφηνεν, ὅτι καὶ σύ, πρὶν εἰς τοῦθ' ἥκειν τὸ σῶμα, Τρώων τις ἢ Ἀχαιῶν ἦς ἢ ὁ δεῖνα;” ... “πρὸς τοῦτον,” ἔφη “Ἀπολλώνιε, καὶ τὸν πρόγονον θεώρει τὸν ἐμόν, μᾶλλον δὲ τὸ πρόγονον σῶμα· τουτὶ γὰρ καὶ Πυθαγόρας Εὔφορβον ἡγεῖτο.

アポッローニオスは質問に戻って言った。「魂（ψυχῆς）についてはどのようにお考えでしょうか」イアルカースは答えた。「それはピュータゴラースが君たちに、そして私たちがエジプト人に伝えたことと同じですよ」アポッローニオスは言った。「とい

うことは、ピュータゴラースがエウポルボスになって現れたように、あなたもいまの肉体に至る前にトロイアー人かアカイアー人か他のなにかだったとおっしゃるのでしょうか」……イアルカースは言った。「アポッローニオスよ、彼［＝アキッレウス］を私の先祖と、あるいはむしろ先祖の肉体と比較してみてください。それこそ、ピュータゴラースがエウポルボスとみなしたものだからです」

二人は、ピュータゴラースの名前とともに語られることの多い魂の不死性および輪廻転生の話をしている[20]わけだが、ここでのエウポルボスも、『イーリアス』におけるような戦士としてとくに描かれているわけではなく[21]、あくまでピュータゴラースの前世の姿として言及されている。

『テュアナのアポッローニオス』でエウポルボスに言及がなされるのは以上ですべてだが、合わせて確認しておくべきなのが、同じピロストラトスの『英雄物語』におけるエウポルボスの扱いである。ホメーロス叙事詩の「修正」をテーマとするこの対話篇（詳しくは後述する）では、トロイアー戦争に参加した英雄たちにスポットライトが当てられるのだが、エウポルボスにかんして、対話者の一人であるぶどう園主が、以下のような説明をしている。

Περὶ δὲ Εὐφόρβου τοῦ Πάνθου, καὶ ὡς γένοιτό τις ἐν Τροίᾳ Εὔφορβος καὶ ἀποθάνοι ὑπὸ τοῦ Μενέλεω, τὸν Πυθαγόρου, οἶμαι, τοῦ Σαμίου λόγον ἤκουσας. Ἔλεγε γὰρ δὴ ὁ Πυθαγόρας Εὔφορβος γεγονέναι, μεταφῦναί τε Ἴων μὲν ἐκ Τρωός, σοφὸς δὲ ἐκ πολεμικοῦ, κεκολασμένος δὲ ἐκ τρυφῶντος, τήν τε κόμην, ἣν σοφὸς γενόμενος αὐχμῷ ἐκοσμεῖτο χρυσῆν ἐν Τροίᾳ ἐποιεῖτο, ὁπότ’ ἦν Εὔφορβος.

パントオスの子エウポルボスについてですが、トロイアーでエウポルボスなる者に生まれ、メネラーオスの手にかかって死んだというサモス人ピュータゴラースの説明もあなたは聞いたと思います。つまり、ピュータゴラースの話では、自分はエウポルボスになったあと、トロイアー人からイオーニアー人に、戦士から賢者に、放埒な男から誠実な男に生まれ変わり（μεταφῦναί）、また髪は、トロイアーでエウポルボスとして生きていたときは金髪にしていたものの、賢者になってからは汚れを飾りにしていたということです。[22]

---

[20] Riedweg (2005), 62-63.

[21] 比較のために、同時代人ルーキアーノスによるエウポルボスの取り扱いについて言及しておこう。彼の『夢あるいは雄鶏』第 17 章では、エウポルボスは、パトロクロスを負傷させたのではなく、彼を殺害したということになっており（！）、まさに『イーリアス』的な武勲にスポットライトが当てられている。

[22] *Her*. 42. 『英雄物語』のテクストは Follet ed. (2018)を用いる。日本語訳はすべて筆者によるものである。

「生まれ変わ（る）」（μεταφῦναί）という表現からも明らかなように、ここでもエウポルボスはピュータゴラースの前世の姿として提示されている。『テュアナのアポッローニオス』における一連の描写と合わせて考えてみると、どうやらピロストラトスの解釈においては、『イーリアス』のエウポルボスは、戦場での活躍ではなく、もっぱら「転生」と関連づけられているようだ。

さて、エウポルボスを象徴的存在とするアポッローニオスの「転生」の思想については、これまでの引用でも確認できたように、「魂」（ψυχή）がキーワードとなる。それを踏まえてここで取り上げてみたいのが、作品のクライマックスでもある、アポッローニオスが宿敵ドミティアーヌスと対峙するシーンである。法廷に赴いたアポッローニオスは、訊問を受けたのち、ドミティアーヌスからローマでの引き続きの滞在を命じられるが、そのときにこう言い返す。

> “δός, εἰ βούλοιο, κἀμοὶ τόπον, εἰ δὲ μή, πέμπε τὸν ληψόμενόν μου τὸ σῶμα· τὴν γὰρ ψυχὴν ἀδύνατον. μᾶλλον δὲ οὐδ' ἂν τὸ σῶμα τοὐμὸν λάβοις· ‘οὐ γάρ με κτενέεις, ἐπεὶ οὔτοι μόρσιμός εἰμι.’”
>
> 「もしお望みなら、私にも場所を提供しなさい。もしそれをお望みでないのなら、人を送って私の肉体（σῶμα）をとらえさせなさい。魂（ψυχὴν）のほうは無理でしょうから。ただあなたは私の肉体（σῶμα）もとらえられないでしょう。『あなたは私のことを殺せない、私は死すべき人間ではないからだ』（οὐ γάρ με κτενέεις, ἐπεὶ οὔτοι μόρσιμός εἰμι）」[23]

アポッローニオスは、心身二元論を前提としたうえで、ドミティアーヌスは彼の魂（ψυχὴν）も身体（σῶμα）も捕まえることができないと言い放つ。先に見たイアルカースとの議論のなかでも暗示されていたように、アポッローニオスは魂の不死性および輪廻転生を信じているため、魂が捕えられることは絶対にないと考えているのはもちろん、身体のほうも、何人も捕えることはできないと考えている[24]。ここで看過できないのは、アポッローニオスが自身のこの無敵状態を表現するに際し、「あなたは私のことを殺せない、私は死すべき人間ではないからだ」（οὐ γάρ με κτενέεις, ἐπεὶ οὔτοι μόρσιμός εἰμι）と

---

[23] 8.5.

[24] ピロストラトスの説明（1.4）によると、妊娠中のアポッローニオスの母親のもとに神のプローテウスが現れ、彼女が生むのは、「とらえることが困難な」（κρείττων τοῦ ἁλῶναι）プローテウスだと予言したという。これこそ、アポッローニオスの身体（σῶμα）が拘束不可能である根本的な理由だろう。じっさい、アポッローニオスは、ダミスとともにローマで収監されていたとき、なんの力も加えずに足枷から足を外し、その直後また足を足枷に苦労なく戻す、という（ダミスに言わせれば）「神的な」（θεία）側面を見せている（7.38）。

述べている点だ[25]。というのも、この文句は、『イーリアス』第 22 歌 13 行からの引用だからである[26]。典拠の『イーリアス』に目を向けてみると、これは、トロイアー兵アゲーノールに姿を変えたアポッローン神が、真相を知らずに追跡してくるアキッレウスにたいし吐く言葉である[27]。アポッローンは神である（人間ではない）ため、（神ではなく）人間のアキッレウスが殺すことはできない、という理屈がここでは働いている。作中の方々で示唆されているように、アポッローニオスは神（的存在）であるため、人間のドミティアーヌスが彼を殺すことはできない、という意味でこの文句が用いられているのはすぐに理解できる[28]。ただ、この文句が、他でもないアポッローン神の口から発せられたものであるということは、少し突っ込んで考える必要がある。というのも、アポッローニオスとアポッローンは、ある意味同一の存在だからだ。たとえば、アポッローニオスがイアルカースと予言術をめぐって対話するシーン（3.42）で、アポッローニオスとアポッローンの結びつきが以下のように強調されるのは注目に値する。

> ἐπαινῶν αὐτὸν ὁ Ἰάρχας “οἱ μαντικῇ” ἔφη “χαίροντες, ὦ χρηστὲ Ἀπολλώνιε, θεῖοί τε ὑπ' αὐτῆς γίνονται καὶ πρὸς σωτηρίαν ἀνθρώπων πράττουσι. τὸ γάρ ἃ χρὴ ἐς θεοῦ ἀφικόμενον εὑρέσθαι, ταῦτα αὖ, ὦ χρηστέ, ἐφ’ ἑαυτοῦ προϊδέσθαι προειπεῖν τε ἑτέροις, ἃ μήπω ἴσασι, πανολβίου τινὸς ἡγοῦμαι καὶ ταὐτὸν ἰσχύοντος τῷ Ἀπόλλωνι τῷ Δελφικῷ ... δοκεῖ μοι ... καθαρῶς δὲ αὐτὸν προφητεύειν ἑαυτοῦ καὶ τοῦ περὶ τῷ στέρνῳ τρίποδος συνιέντα.”
>
> イアルカースは彼［＝アポッローニオス］を称賛しながら言った。「善良なるアポッローニオスよ、予言術に喜びを覚える者というのは、その術によって神のように（θεῖοί）なり、人間を救済するために行動するのだ。善良なる者よ、神のいるところに足を運んで獲得しなければならないことを自分で予言し、相手がまったく知らないことを予言してやるというのは、私が思うに、真に恵まれた者、そして、デルポイのアポッローン（τῷ Ἀπόλλωνι τῷ Δελφικῷ）と同じ力を有する者だけができることなのだ。……私の考えでは……この者［＝アポッローニオス］は清浄な心で予言をおこなっており、心のなかにある三脚釜のことを理解している」

---

[25] この言葉は、8.8 でも再度紹介されている。

[26] 2 語目の γάρ は『イーリアス』では μέν となっているが、重大な問題ではない。

[27] 文脈の把握のためにアポッローンの言葉全体を記しておく。「ペーレウスの息子よ、なぜその駿足で私を追いかけてくるのだ。自身は死すべき人間の身で、相手は不死の神だ。私が神であるということをお前はまだわかっていない。躍起になって追いかけてきているのだからな。もうお前はトロイアー人のために骨を折ることはしないのか。あやつらはお前に恐れをなし、町に閉じこもったのだぞ。なのにお前はこんなところに寄り道をしている。お前は私のことは殺せない。私は死すべき人間ではないからだ」（*Il.* 22.8-13）。

[28] Cf. Robiano (2016), 109-110.

本作でアポッローニオスは予言術を心得た人物として描かれている[29]が、ここでは、彼はデルポイのアポッローン（τῷ Ἀπόλλωνι τῷ Δελφικῷ）に等しい神のような（θεῖοί）存在とみなされている。アポッローニオスは、まさに人間界のアポッローンなのだ[30]。

また、ある伝承によると、アポッローニオスが「私の知恵の源泉」（4.16, σοφίας ἐμῆς πρόγονος; 8.7, τὸν ... πρόγονον τῆς ἐμαυτοῦ σοφίας）と呼び崇敬するピュータゴラースも、アポッローン神そのものなのだという[31]。本作のアポッローニオスがピュータゴラース哲学の権化であるとする[32]と、またもやアポッローニオスはアポッローン、という等式が成り立つ。わかりやすく示せば、「アポッローン＝ピュータゴラース＝アポッローニオス」というわけだ。アポッローニオスをアポッローンと同一視する先のイアルカースの言葉と合わせて考えてみるならば、ドミティアーヌスに対峙するアポッローニオスが『イーリアス』のアポッローンの言葉を突然引いてくるのも理解できる。アポッローニオスは、一時的にアポッローンという「神」に変化して、「人間」のドミティアーヌスに自身の絶対的優位性を主張しているのである。

アポッローン神については、さらに興味深い事実がある。じつは、『イーリアス』において、この神はエウポルボスと強い関係性を持っているのだ。そもそもエウポルボスがパトロクロスに攻撃を仕掛ける前に、その準備をしたのがアポッローンなのである。ホメーロスの記述によると、エウポルボスがパトロクロスに向かい槍を投げる直前に、アポッローンがパトロクロスの力を削ぎ、チャンス作りをしている[33]。パトロクロスについて、「神［＝アポッローン］の打撃と［エウポルボスの］槍で傷ついた」（16.816, θεοῦ πληγῇ καὶ δουρὶ δαμασθεὶς）と言われているのは見逃せない。アポッローンとエウポルボスのコンビネーションが強調されているわけである。また、エウポルボスが殺されたとき、ふたたび（変装した）アポッローンが戦場に現れ、剥がれたエウポルボスの武具をメネラーオスが持ち去るのを妨げる[34]。エウポルボスの味方のアポッローンは、メ

---

[29] 彼がおこなう予言は数多くあるが、たとえば 5.11 では、ネローの次にローマ皇帝になるのがガルバ、オトー、ウィテッリウスであると言い当てる。

[30] アポッローン（Ἀπόλλων）とアポッローニオス（Ἀπολλώνιος）の名前の類似性もどこか示唆的である。なお、ポルピュリオス『ピュータゴラースの生涯』には、アポッローニオスはアポッローンの息子であるという伝承が記されている（2, τινὰς δ' Ἀπόλλωνος αὐτὸν ἱστορεῖν καὶ Πυθαΐδος τῷ γόνῳ）。

[31] ディオゲネース・ラーエルティオス『著名な哲学者たちの生涯と言葉』8.11. イアンブリコス『ピュータゴラースの生涯』5-8 では、ピュータゴラースの父親がアポッローンであるという伝承について検証がなされている。『テュアナのアポッローニオス』1.1 では、ピュータゴラースのもとにアポッローンが顕現したという伝承が紹介されている（ἑαυτῷ δὲ τόν τε Ἀπόλλω ἥκειν ὁμολογοῦντα, ὡς αὐτὸς εἴη）。

[32] アポッローニオスは、青年期に師匠のエウクセノスと離別するに際し、「私はピュータゴラースのやり方で生きていきます」（1.7, ἐγὼ ... τὸν Πυθαγόρου ζήσωμαι）と述べている。アポッローニオスとピュータゴラースの密接なつながりについては、Flinterman (2009)および Riedweg (2005), 125 を参照。

[33] *Il.* 16.804-806.

[34] *Il.* 17.70-82.

ネラーオスの行為を「不快に思った」（17.71, ἀγάσσατο）のだという。まとめると、『イーリアス』におけるエウポルボスの戦闘シーンにおいては、アポッローンが深く関与しており、両者の強い結びつきが前面に出されているのである[35]。

エウポルボスとアポッローンのつながりは、ピロストラトスにも強く意識されていたようだ。というのも、先に引いた『英雄物語』第 42 章の一節の続きに、以下のようなことが語られているからである。

> ὁ δὲ Πρωτεσίλεως τὸν Εὔφορβον ἥλικα ἑαυτοῦ ἡγεῖται καὶ ἐλεεῖ, καὶ ὁμολογεῖ τὸν Πάτροκλον ὑπ᾽ αὐτοῦ τρωθέντα παραδοθῆναι τῷ Ἕκτορι. Εἰ δὲ εἰς ἄνδρας ἦλθεν, οὐδὲν ἄν φησιν αὐτὸν κακίω νομισθῆναι τοῦ Ἕκτορος. Τὴν μέν γε ὥραν αὐτοῦ καὶ τοὺς Ἀχαιούς φησι θέλγειν· ἐοικέναι γὰρ αὐτὸν ἀγάλματι ὁπότε κάλλιστα ἑαυτοῦ ὁ Ἀπόλλων ἀκερσεκόμης τε καὶ ἁβρὸς φαίνοιτο.
> プローテシラーオスは、エウポルボスは自分と同年代と考えており、彼のことを憐れみながらも、彼が傷をつけたパトロクロスがヘクトールに譲られたことは是としています。ただもし彼が成年に達していたら、そのヘクトールにけっして劣らない人物とみなされていただろうとも言っています。また、彼の若々しさはアカイアー人たちをも魅了したとのことで、それは、このうえなく美しい仕方でアポッローンが髪を伸ばし優雅なたたずまいをしている像に彼が似ていたためだ、と言っています。

『英雄物語』は、ぶどう園主がギリシア兵プローテシラーオス（の幻影）から聞いたトロイアー戦争の「真実」をフェニキアの商人に語るという形式をもつわけだが、ここでは、プローテシラーオスの目から見たエウポルボスのことが紹介されている。パトロクロスへの攻撃にあたり彼がアポッローンの力を借りたという点には触れられていないものの、彼の魅力的な容姿がアポッローンの像に似ているとされているのは見逃せない。じっさい『イーリアス』でも、エウポルボスの見た目の良さが強調されており[36]、ピロストラトスは、この外見という点でエウポルボスとアポッローンを結びつけようとしているのである。

アポッローニオスがドミティアーヌスに向けて言い放った『イーリアス』第 22 歌 13 行の引用（「あなたは私のことを殺せない、私は死すべき人間ではないからだ」）に戻ろう。先に、これはアポッローニオスが一時的にアポッローンという神に変化して使った言葉だと述べたが、このアポッローンが、少なくともピロストラトスの理解において

---

[35] Cf. Janko (1994), apud 16.806-807.

[36] *Il.* 17.51-52, αἵματί οἱ δεύοντο κόμαι Χαρίτεσσιν ὁμοῖαι πλοχμοί θ᾽, οἳ χρυσῷ τε καὶ ἀργύρῳ ἐσφήκωντο.（優美の女神のそれに似た彼［＝エウポルボス］の髪と金と銀で留められた彼の巻き毛が血に塗れる。）『英雄物語』第 33 章では、エウポルボスは「美しさ」（κάλλος）をそなえた英雄の一人に挙げられている。

はエウポルボスと一心同体であるということは忘れてはならない。アポッローンが憑依したアポッローニオスの背後には、間違いなくエウポルボスの影がちらついている。『イーリアス』の描写をふまえると、この三者はゆるやかに連結した生命体なのであり、アポッローンを媒介とするアポッローニオスとエウポルボスのつながりはけっして無視すべきでない。上で取り上げた『テュアナのアポッローニオス』の冒頭の一節を思い出そう。そこでは、『イーリアス』の名だたる英雄たちのなかで、エウポルボスの名前が単独で出されているのであり、これはやはり、彼が主人公アポッローニオスの別形態の人物であるからであろう。

さて、『テュアナのアポッローニオス』の冒頭のエウポルボスは、「転生」の象徴として登場するわけであるが、面白いことに、彼の存在は、本作の末尾においても感じられる。該当の部分（8.31）を見てみよう。

> Περὶ ψυχῆς δέ, ὡς ἀθάνατος εἴη, ἐφιλοσόφει ἔτι, διδάσκων μέν, ὅτι ἀληθὴς ὁ ὑπὲρ αὐτῆς λόγος ... τοῦ δὲ Ἀπολλωνίου ἐξ ἀνθρώπων μὲν ἤδη ὄντος, θαυμαζομένου δ' ἐπὶ τῇ μεταβολῇ καὶ μηδ' ἀντιλέξαι θαρροῦντος μηδενός, ὡς οὐκ ἀθάνατος εἴη ...
>
> ［アポッローニオスは］魂が不死である（Περὶ ψυχῆς ... ἀθάνατος εἴη）ということを哲学的に説きつづけており、魂についての自分の話は正しいと教えていた……アポッローニオスはすでに人間ではなくなっており、転生（μεταβολῇ）によって驚きを与え、彼が不死（ἀθάνατος）であるはずはないなどと強気に反論する者もいなかった……

語り手ピロストラトスが言うには、アポッローニオスの最期については諸説あったようだが、彼自身は、アポッローニオスの魂は不死で、アポッローニオスは「転生」（μεταβολή）をした、という説を採っている。この見解の当否はさておくとして、重要なのは、本作の最終部においても、「転生」についての話がなされているという点である。作品の最初も「転生」の概念が出てきていたが、これは偶然ではあるまい。ピロストラトスは、明らかに意識的に自作を「転生」で始め、「転生」で閉じている。このように考えてくると、作品の冒頭のエウポルボスは、作品の末尾でも想起されうる人物とみなすべきだろう。エウポルボスは、『イーリアス』では目立った活躍を見せない一兵士に過ぎないが、『テュアナのアポッローニオス』では、作品の外枠の形成に深く関わる特別な人物として描かれているのである。

２．アキッレウスの描写

では次に、本作の『イーリアス』受容の問題を考える際にキーとなるもう一人の英雄、アキッレウスについて考察していくことにしよう。アキッレウスへの言及や彼の細かな描写は、もっぱら前半（第１巻～第４巻）に限定されているが、ここでは、まず 3.19 の

シーンを取り上げたい[37]。これは、先にも取り上げた、前世の問題をめぐるアポッローニオスとインド人のイアルカースによる議論のシーンだが、ここでアポッローオスは、以下のようにイアルカースにたいし自身のアキッレウスの評価を述べる。

> ἐπεὶ τοίνυν ἤρου με περὶ τοῦ προτέρου σώματος, εἰπέ μοι, τίνα θαυμασιώτερον ἡγῇ τῶν ἐπὶ Τροίαν τε καὶ ὑπὲρ Τροίας ἐλθόντων;" "ἐγώ" ἔφη "Ἀχιλλέα τὸν Πηλέως τε καὶ Θέτιδος· οὗτος γὰρ δὴ κάλλιστός τε εἶναι τῷ Ὁμήρῳ ὕμνηται καὶ παρὰ πάντας τοὺς Ἀχαιοὺς μέγας ἔργα τε αὐτοῦ μεγάλα οἶδε."
>
> 「さてあなた［＝アポッローニオス］が私［＝イアルカース］に前世の肉体についてお尋ねになったので、あなたは、トロイアーに攻めた者たちおよびトロイアーを守ろうとした者たちのなかでとくに誰が優れているとお思いか、教えていただけないか」アポッローニオスは言った。「それはペーレウスとテティスの息子のアキッレウスだと思っています。ホメーロスは、彼がもっとも美しい姿をもっていて、どのアカイアー人よりも偉大であると歌っており、彼の武勲が偉大であると知っているのです」

このようにアポッローニオスは、アキッレウスをトロイアー戦争の参加者のなかでもっとも優れた人物とみなす。この一点だけでも、本作における『イーリアス』の重要性がわかるだろう。けっきょくイアルカースにはアキッレウスの偉大さは理解してもらえないものの[38]、アポッローニオスは、第 4 巻においてイーリオンに赴き、この尊敬するアキッレウスの墓に足を運ぶ[39]。そこでの彼の様子は次のように描写されている。

> ... τοὺς μὲν ἑταίρους ἐκέλευσεν ἐπὶ τὴν ναῦν χωρεῖν, αὐτὸς δὲ ἐπὶ τοῦ κολωνοῦ τοῦ Ἀχιλλέως ἐννυχεύσειν ἔφη. δεδιττομένων οὖν τῶν ἑταίρων αὐτόν ... τόν τε Ἀχιλλέα φοβερὸν ἔτι φασκόντων φαίνεσθαι (τουτὶ γὰρ καὶ τοὺς ἐν τῷ Ἰλίῳ περὶ αὐτοῦ πεπεῖσθαι), "καὶ μὴν ἐγώ" ἔφη "τὸν Ἀχιλλέα σφόδρα οἶδα ταῖς συνουσίαις χαίροντα· τόν τε γὰρ Νέστορα τὸν ἐκ τῆς Πύλου μάλα ἠσπάζετο, ἐπειδὴ ἀεί τι αὐτῷ διῄει χρηστόν, τόν τε Φοίνικα τροφέα καὶ ὀπαδὸν καὶ τὰ τοιαῦτα τιμῶν ὠνόμαζεν, ἐπειδὴ διῆγεν αὐτὸν ὁ Φοῖνιξ λόγοις, καὶ τὸν Πρίαμον δὲ καίτοι

---

[37] これより前には、2.22 と 2.33 でアキッレウスへの言及があるが、名前のみにとどまっている。前者は、いわゆる「楯」の持ち主として、後者は、屈強な戦士の代表例としてである。

[38] イアルカースは、自らの前世の存在であるガンゲース王をアキッレウスよりも優れた人物とみなしている（3.20）。

[39] このエピソードについては、Zeitlin (2001), 251-255; Grossardt (2009); Kim (2010), 189-191 も参照。Burgess (2009), 111-131 では、アキッレウスの現実世界における埋葬地について考察がなされており、『テュアナのアポッローニオス』もごく簡単に触れられている（115-116）。

πολεμιώτατον αὐτῷ ὄντα πρᾳότατα εἶδεν, ἐπειδὴ διαλεγομένου ἤκουσε, καὶ Ὀδυσσεῖ δὲ ἐν διχοστασίᾳ ξυγγενόμενος οὕτω μέτριος ὤφθη, ὡς καλὸς τῷ Ὀδυσσεῖ μᾶλλον ἢ φοβερὸς δόξαι.”

……彼［＝アポッローニオス］は仲間たちに船に戻るよう命じ、自分はアキッレウスの塚でこの晩を過ごすと言った。仲間たちは……アキッレウスはいまだに恐ろしい形相をしている、これはイーリオンの人たちも信じて疑わないことなのだから、と言って、彼を怖がらせようとした。彼は言った。「ただじっさいのところは、アキッレウスが人との交流（συνουσίαις）に大きな喜びを覚えることを私は知っている。彼は、いつも自分になんらか有益な助言を与えてくれていたということで、ピュロスからやって来たネストールを大いに歓迎していた。また、さまざまな話で自分のことを導いてくれていたポイニクスのことは、敬意をもって、『養父』とか『僚友』と呼んでいた。プリアモスは、自分にとって最大の敵ではあったものの、言葉に耳を傾けることによってこの上なく温和に対応した。また、オデュッセウスとは不和の関係にあったが、このオデュッセウスには彼は慎み深く見え、恐ろしい男というよりも立派な男だとみなしていた」[40]

「アキッレウスは恐ろしい」という仲間たちの見方（これは、イアルカースの考え方とも共通している[41]）とは反対に、アポッローニオスはアキッレウスの愛想の良さに目を向ける。『イーリアス』において、たしかにアキッレウスは「恐ろしい」戦士として描かれているが、たとえばここでアポッローニオスも触れている第 24 歌のプリアモスとの会見の場面では、彼はむしろ、相手の説得を受け入れ宿敵ヘクトールの遺体を返還してやるほどの「温和な」人物である。アポッローニオスの頭のなかでは、アキッレウスは、『イーリアス』の大半で強調されるような腕力自慢の戦士ではなく、物わかりのいい、話の通じる親切な人間としてイメージされている[42]。

それにしても、本作にアキッレウスを導入するにあたり、なぜピロストラトスは、『イーリアス』で中心的に描かれる無敵の武人の側面ではなく、「人との交流（συνουσίαις）に大きな喜びを覚える」という側面に光を当てているのだろうか。筆者の見解では、これは、このすぐあとに描かれるアポッローニオスとアキッレウスの問答に自然さを与えるための、ピロストラトスによる物語上の装置とみなせる。どういうことかというと、上の引用の場面のあとに、アポッローニオスは、アキッレウスにたいし、ホメーロス作

[40] 4.11.

[41] イアルカースは、アキッレウスにたいするアポッローニオスの肯定的評価の言葉（先の 3.19 の引用の中に見える）を聞いたのち、「アキッレウスは女性［＝ブリーセーイス］を王［＝アガメムノーン］に奪われると、怒り（μῆνιν）に走り、冷酷で獰猛になった」と述べている（3.20）。なお、アキッレウスの「怒り」（μῆνις）については、のちに議論をおこなう。

[42] また、4.16 でも、アポッローニオスはアキッレウスについて「恐ろしく（δεινός）見えたものの、朗らかさ（φαιδροῦ）を失うことはなかった」と述べている。

品の「真実性」をめぐる 5 つの質問をぶつけるのだが、その回答者のアキッレウスが「人との交流（συνουσίαις）に大きな喜びを覚える」ような人物でなければ、この問答のシーン自体がきわめてぎこちないものになってしまうのである。ここで参考になるのが、ピロストラトスの対話篇『英雄物語』で、同じくホメーロス作品の「真実性」について貴重な情報を提供するプローテシラーオスの描写である。本作で焦点が当てられているのは、プローテシラーオス（の幻影）と対話者の一人であるぶどう園主の日々の「交流」（7, ξυνουσίαν）であり、この対話者によると、プローテシラーオスは、「親しみやすい」（10, φίλον）雰囲気を持ち、「乱暴なことは何一つしない」（11, ὕβρει οὐδὲν πράττει）ような男である[43]。ピロストラトスは、（とくに必然性を有しているわけではない）プローテシラーオスに情報提供者としての説得性を持たせるために、わざわざこのような性格づけをしているわけである。『テュアナのアポッローニオス』のアキッレウスも、基本的にはこの『英雄物語』のプローテシラーオスと同じような性質を持つ人間であるとみなすべきだろう[44]。アキッレウスが、仮に戦いにしか興味のないような荒くれ者（これが『イーリアス』における基本的イメージである）だとすると、アポッローニオスにたいする情報提供者としては不適格となってしまう。それだからこそ、ピロストラトスの描くアキッレウスは、「人との交流（συνουσίαις）に喜びを覚える」ような人物でなければならないのである。

アポッローニオスとアキッレウスの会見の様子は、知りたがりのダミスに促されたアポッローニオスの口をつうじて報告される（4.16）。彼の話の中心にあるのは、先にも述べた 5 つの質問で、この 5 つはすべてホメーロス作品の「真実性」をめぐるものとなっている[45]。具体的には、「アキッレウスはパトロクロスと一緒に埋葬されたのか」「ポリュクセネーはアキッレウスのために殺されたのか」「ヘレネーはトロイアーにやって来たのか」「トロイアーにやってきたギリシア軍はあれほどの大人数であれほど立派だったのか」「ホメーロスはパラメーデースの受難のことを知らなかったのか」という 5 つの問いかけだが、まず前提として押さえておきたいのは、この 5 つのテーマすべてが『英雄物語』でも扱われているという点である[46]。ピロストラトスがこの 5 つのテーマに強

---

[43] ちなみに、『テュアナのアポッローニオス』のアキッレウスと『英雄物語』のプローテシラーオスは、ともにテッサリア式の外套をまとっている（*VA* 4.16; *Her*. 10）という点も共通している。

[44] Cf. Billault (2000), 127-128.

[45] ホメーロス作品の「真実性」の問題は、第二次ソフィスト思潮の著作家たちが大いに好んだものだが、これについては、ディオーン・クリューソストモス、ルーキアーノス、ピロストラトスを取り上げる Kim (2010)を参照。なお、ルーキアーノスの『本当の話』においても、語り手の「私」が幸福者の島で暮らすホメーロスに会いに行き、5 つの質問をぶつける（2.20）。Grossardt (2009)は、『テュアナのアポッローニオス』への影響の可能性を指摘している。

[46] それぞれの対応箇所は以下のとおり。質問 1：第 51 章、質問 2：第 51 章、質問 3：第 25 章、質問 4：第 7 章、質問 5：第 43 章。Cf. Kim (2010), 190.

い興味を持っていたということだろうが、このなかでもとくに彼の関心を引いていたであろうものが、5 つ目の、ギリシアの勇士パラメーデースをめぐる事件である。こう言える最大の理由として、『英雄物語』においてパラメーデースが明らかに特別扱いされている、ということがある[47]。ピロストラトスは、プローテシラーオスを情報源、ぶどう園主を話し手として、トロイアー戦争に参加した英雄たちの「真実」を一人ずつ順番に明かしていくのだが、パラメーデースのエピソードは、そのぶどう園主の話のちょうど中央に位置しているのみならず、アキッレウスのエピソードを除いて、もっとも長く語られているのである（第 33 章）。また、アポッローニオスの 5 つの質問の順番ないし配置に目を向けても、パラメーデースにかんする 5 番目の問いの異質性が感じ取れる。1 番目と 2 番目は「アキッレウス個人にかかわる質問」として、また、3 番目と 4 番目は「トロイアー戦争全般にかかわる質問」としてそれぞれ一括りにすることが可能だが、5 番目だけは明らかに仲間はずれで、その他のものとは性質が異なっている。ピロストラトスにはパラメーデースにたいする特別な思い入れがあったと考えるのが自然だろう。

それでは、アポッローニオスの 5 番目の質問とそれにたいするアキッレウスの回答の中身を具体的に検討していくことにしよう。両者のやりとりは以下のように描かれている。

> πέμπτον ἠρόμην· ‘τί παθὼν Ὅμηρος τὸν Παλαμήδην οὐκ οἶδεν, ἢ οἶδε μέν, ἐξαιρεῖ δὲ τοῦ περὶ ὑμῶν λόγου;’ ‘εἰ Παλαμήδης’ εἶπεν ‘ἐς Τροίαν οὐκ ἦλθεν, οὐδὲ Τροία ἐγένετο· ἐπεὶ δὲ ἀνὴρ σοφώτατός τε καὶ μαχιμώτατος ἀπέθανεν, ὡς Ὀδυσσεῖ ἔδοξεν, οὐκ ἐισάγεται αὐτὸν ἐς τὰ ποιήματα Ὅμηρος, ὡς μὴ τὰ ὀνείδη τοῦ Ὀδυσσέως ᾄδοι.’ καὶ ἐπολοφυράμενος αὐτῷ ὁ Ἀχιλλεὺς ὡς μεγίστῳ τε καὶ καλλίστῳ νεωτάτῳ τε καὶ πολεμικωτάτῳ σωφροσύνῃ τε ὑπερβαλομένῳ πάντας καὶ πολλὰ ξυμβαλομένῳ ταῖς Μούσαις, ‘ἀλλὰ σύ,’ ἔφη ‘Ἀπολλώνιε (σοφοῖς γὰρ πρὸς σοφοὺς ἐπιτήδεια), τοῦ τε τάφου ἐπιμελήθητι καὶ τὸ ἄγαλμα τοῦ Παλαμήδους ἀνάλαβε φαύλως ἐρριμμένον·
>
> 「私［＝アポッローニオス］は 5 つ目の質問をした。『ホメーロスはパラメーデースがどんな目に遭ったのか知らないのですか。それとも、知っていながらあなた方［＝アキッレウスをはじめとするトロイアー戦争の参加者たち］の物語から彼を除外しているのですか』アキッレウスは答えた。『もしパラメーデースがトロイアーへ行っていなかったら、トロイアーも存在しないことになっていただろう。彼は、誰よりも知恵に優れて（σοφώτατος）いて、腕力も随一だったが、オデュッセウスが期待したとおりに死んでしまった。ホメーロスも、オデュッセウスの不名誉な行為を歌わないようにするために、自分の詩のなかに彼を登場させなかったのだ』アキッレウスは、身体

[47] Hodkinson (2011), 59-101 も同様の立場である。Cf. Zeitlin (2001), 251.

の大きさと美しさ、そして戦う能力において一番であるのみならず、あらゆる者をしのぐほどの自制心をそなえ、ムーサたちにたいし巨大な貢献をおこなった若者として、パラメーデースのことを嘆きつつ（ἐπολοφυράμενος）、こう言った。『アポッローニオスよ、知恵ある者（σοφοῖς）にとっては知恵ある者（σοφοὺς）が大切であるから、パラメーデースの墓に詣でて、ひどい仕方で倒れてしまっている彼の像を元通りに立ててやるのだ』」

アポッローニオスの質問において核となっているのは、「ホメーロスはパラメーデースの受難のことを知らなかったのか、それとも知っていたのか」という点である。彼は、ホメーロス叙事詩においてパラメーデースのことが一度も言及されない[48]ということを前提としてこの質問を相手にぶつけているが、アキッレウスが提示する回答は、後者である。彼によると、ホメーロスは意図的にパラメーデースを除外したのであり、そこにはオデュッセウスにたいする忖度があったとのことだ。パラメーデースの受難（オデュッセウスの佯狂をギリシア軍の面前で暴いた結果、オデュッセウスの恨みを買い、デマを流され刑死に追い込まれる）を語る際には、オデュッセウスのマイナス面について語ることは避けられず、これはオデュッセウスのプラス面を前面に押し出した『イーリアス』『オデュッセイア』の基本コンセプトと矛盾する。これがホメーロスのパラメーデース除外の背景にある論理だった。ここで思い出されるのは、『英雄物語』のなかに、パラメーデースの扱いをめぐる、ホメーロスとオデュッセウスの裏取引のシーンが含まれているということである。ぶどう園主によると、ホメーロスは、トロイアー戦争の「真実」をオデュッセウスから教えてもらうべく、あるときイタケーに足を運んだのだという。ぶどう園主は、そのときの二人のやりとりを、次のように紹介する。

ἐπεὶ δὲ ἀνελθεῖν τὸν Ὀδυσσέα, ὁ μὲν ἠρώτα αὐτὸν τὰ ἐν Ἰλίῳ, ὁ δὲ εἰδέναι μὲν πάντα ἔλεγε καὶ μεμνῆσθαι αὐτῶν, εἰπεῖν δ’ ἂν οὐδὲν ὧν οἶδεν εἰ μὴ μισθὸς αὐτῷ παρ’ Ὁμήρου γένοιτο, εὐφημίαι τε ἐν τῇ ποιήσει καὶ ὕμνος ἐπὶ σοφίᾳ τε καὶ ἀνδρείᾳ. Ὁμολογήσαντος δὲ τοῦ Ὁμήρου ταῦτα καὶ ὅ τι δύναιτο, χαριεῖσθαι αὐτῷ ἐν τῇ ποιήσει φήσαντος, διῄει ὁ Ὀδυσσεὺς πάντα ξὺν ἀληθείᾳ τε καὶ ὡς ἐγένετο ... Ἀπιόντος δὲ ἤδη τοῦ Ὁμήρου βοήσας ὁ Ὀδυσσεὺς· “Παλαμήδης με” ἔφη “δίκας ἀπαιτεῖ τοῦ ἑαυτοῦ φόνου καὶ οἶδα ἀδικῶν καὶ πάντως μὲν πείσομαί τι ... εἰ δὲ τοῖς ἄνω ἀνθρώποις μὴ δόξω εἰργάσθαι τὸν Παλαμήδη ταῦτα ἧττόν με ἀπολεῖ τὰ ἐνταῦθα. Μὴ δὴ ἄγε τὸν Παλαμήδην ἐς Ἴλιον μηδὲ στρατιώτῃ χρῶ μηδέ ὅτι σοφὸς ἦν εἴπῃς. Ἐροῦσι μὲν γὰρ ἕτεροι ποιηταί, πιθανὰ δὲ οὐ δόξει μὴ σοὶ εἰρημένα”.

[48] この点は、3.22 のイアルカースの言葉のなかでも触れられている（μήτε Ὁμήρου ἐπαινέτου ἔτυχεν）。

オデュッセウスが姿を現したとき、ホメーロスは彼にイーリオンにかんすることを尋ねた。それにたいするオデュッセウスの返答は、自分はすべてを知っており、それらを記憶しているが、ホメーロスからの見返り—詩のなかで彼のことを褒め、知恵（σοφίᾳ）と勇気の持ち主として彼を称えること—がないかぎりは、自分が知っていることは何一つとして話さない、というものだった。ホメーロスがこの申し出に同意し、詩のなかでできるかぎり彼をひいきすると述べると、オデュッセウスは真実のままにすべてを語った。……ホメーロスが立ち去ろうとしたとき、オデュッセウスはこう叫んだ。「パラメーデースは、自分を殺したことにかんする私の懲罰を求めている。私は自分が不正を働いた（ἀδικῶν）ことを承知しているし、なんらかの罰を受けることに全面的に承諾せざるをえなくなるだろう。……ただもし地上の人間たちが、私がパラメーデースにそういうことをしたと信じることがなければ、私にたいするここでの罰はより軽いものになるだろう。というわけで、パラメーデースをイーリオンに連れてこないでくれ。あいつを戦士とみなさないでくれ。あいつが知恵ある者（σοφὸς）だったとは言わないでくれ。他の詩人どもがそう言ったところで、お前が黙ってさえいれば信じられることはなかろうから」[49]

『英雄物語』において、オデュッセウスはこの上なく下劣な人間として描かれているが、ホメーロスにたいするこの取引の持ちかけは、それを示すもっともわかりやすい行動だろう。本作のオデュッセウスは、絶大な影響力をもつホメーロスさえ仲間に引き入れてしまえば、トロイア一戦争の「真実」は自分の思うがままにコントロールすることができるということを理解している。パラメーデースは、ホメーロス作品を介したオデュッセウスの卑怯な情報操作により、「忘れられた存在」になってしまったのである。

『テュアナのアポッローニオス』でアポッローニオスの目の前に現れたアキッレウスは、「ホメーロスからの完全無視」という悲劇に見舞われたパラメーデースを救済する役割を担っていると言える。アキッレウスは、パラメーデースのことを、「身体の大きさと美しさ、そして戦う能力において一番であるのみならず、あらゆる者をしのぐほどの自制心をそなえ、ムーサたちにたいし巨大な貢献をおこなった若者」とこの上なく肯定的に評価し、そのような立派な男を失ってしまったことを嘆いている（ἐπολοφυράμενος）。彼のこの役割は、『英雄物語』でパラメーデースを肯定的に評価する（かつその裏返しでオデュッセウスを否定的に評価する）プローテシラーオスとまったく同じで、ぶどう園主によると、彼もまた、パラメーデースのことを話すときにはか

[49] *Her*. 43.

ならず涙を流してしまう（δακρύει）のだという[50]。本作のアキッレウスは、パラメーデースの復権のためのツールになっていると言っても過言ではない。

アキッレウスの言葉のなかでもうひとつ見逃せないのは、彼がパラメーデースの「知恵」（σοφία）に注意を払っているという点である。彼によれば、パラメーデースは「誰よりも知恵に優れて（σοφώτατος）」いたのだという。パラメーデースの卓越した「知恵」については、やはり『英雄物語』でも強調されており[51]、たとえば先に取り上げたホメーロスと裏取引をするオデュッセウスも、パラメーデースが「知恵ある者」（σοφὸς）とみなされることに強い抵抗感を示していて、むしろ自分の「知恵」（σοφίᾳ）にスポットライトが当てられることを望んでいる。ただ、『テュアナのアポッローニオス』の場合、「知恵」というのは、主人公アポッローニオスとダイレクトに結びつく要素であるがゆえ、よりいっそう重要な意味をもつ。じっさい、アキッレウスも、「知恵ある者（σοφοῖς）にとっては知恵ある者（σοφοὺς）が大切である」という言葉を添えたうえで、アポッローニオスにパラメーデースの墓に足を運び、倒れてしまっている彼の像を元通りにするよう指示している。アキッレウスにとって、パラメーデースとアポッローニオスは、「知恵」を共有した同志なのである[52]。アキッレウスは、ここでは、『イーリアス』のときのようなあらゆる人間の注目を集める存在ではなく、パラメーデースとアポッローニオスをつなぐ仲介者として機能していることになる。

アキッレウスとの会見を終えたアポッローニオスは、次に、指示されたとおりパラメーデースの墓を訪問する（4.13）。近くに到着すると、彼は弟子たちに以下のように言う。

> “ἐνταῦθα γάρ που τὸν Παλαμήδην φησὶν ὁ Ἀχιλλεὺς κεῖσθαι, οὗ καὶ ἄγαλμα αὐτοῦ εἶναι πηχυαῖον, ἐν πρεσβυτέρῳ ἢ ὡς Παλαμήδης τῷ εἴδει.” καὶ ἅμα ἐξιὼν τῆς νεὼς “ἐπιμεληθῶμεν”, εἶπεν “ὦ ἄνδρες Ἕλληνες, ἀγαθοῦ ἀνδρός, δι’ ὃν σοφία πᾶσα· καὶ γὰρ ἂν καὶ τῶν γε Ἀχαιῶν βελτίους γενοίμεθα, τιμῶντες δι’ ἀρετήν, ὃν ἐκεῖνοι δίκῃ οὐδεμιᾷ ἀπέκτειναν.”
>
> ［アポッローニオスは言った。］「アキッレウスによれば、パラメーデースはどこかこの辺りに眠っていて、ここには、実際よりも年を取っているように見える、1 ペーキュスの高さのパラメーデースの像もあるとのことだ」そして船から下りるやいなや、彼は言った。「ギリシアの者たち（ἄνδρες Ἕλληνες）［＝アポッローニオスの弟子たち］よ、あらゆる知恵（σοφία）の源泉であるこの善良な男［＝パラメーデース］に思いを致してあげようではないか。私たちは、あのアカイアー人たち（τῶν ... Ἀχαιῶν）［＝パラメーデースを刑死に追いやったギリシア人たち］よりも優れた存在となれるだろう。

[50] *Her*. 33.
[51] この点について、詳しくは Katsumata (2015)を参照。
[52] Hodkinson (2011), 88.

彼らがいかなる正義も認められないかたちで（δίκῃ οὐδεμιᾷ）殺してしまったこの男のことを、その徳性ゆえに称えてあげるのだとしたら」

アポッローニオスは、弟子たちとともにパラメーデースを悼んであげようとしている。アポッローニオスがパラメーデースのことを「あらゆる知恵（σοφία）の源泉」と呼んでいるところからもわかるように、彼がこの英雄を高く評価するのは、その「知恵」ゆえである。また、アポッローニオスが弟子たちのことをあえて「ギリシアの者たち」（ἄνδρες Ἕλληνες）と呼んでいるのも無視できない。彼は、弟子たちをパラメーデースを死に至らしめた「アカイアー人たち」（τῶν ... Ἀχαιῶν）と比べるかたちでこの呼称を用いている。アポッローニオスによれば、「ギリシアの者たち」から明確に区別された「アカイアー人たち」が非難されるべき理由は、彼らが「いかなる正義も認められないかたちで（δίκῃ οὐδεμιᾷ）」パラメーデースを殺したがゆえである。「正義」（δίκη）もまたアポッローニオスが重んじる概念である[53]ため、これを踏みにじった「アカイアー人たち」は彼にとって許されざる男たちなのであり、彼の考えでは、「ギリシアの者たち」は、パラメーデースを称揚することで、「アカイアー人たち」より「優れた存在」になり得るのである[54]。

パラメーデースにたいするアポッローニオスの基本的なとらえ方が把握できたところで、この続きの場面を見てみよう。

> οἱ μὲν δὴ ἐξεπήδων τῆς νεώς, ὁ δὲ ἐνέτυχε τῷ τάφῳ καὶ τὸ ἄγαλμα κατορωρυγμένον πρὸς αὐτῷ εὗρεν. ὑπογέγραπτο δὲ τῇ βάσει τοῦ ἀγάλματος “Θείῳ Παλαμήδει.” καθιδρύσας οὖν αὐτό ... τοιάνδε εὐχὴν ηὔξατο· “Παλάμηδες, ἐκλάθου τῆς μήνιδος, ἣν τοῖς Ἀχαιοῖς ποτε ἐμήνισας, καὶ δίδου γίγνεσθαι πολλούς τε καὶ σοφοὺς ἄνδρας.”
>
> 弟子たちは船から降り、彼［＝アポッローニオス］は［パラメーデースの］墓に行き、そのそばに像が埋まってしまっているのを見つけた。その像の台座には、「神のごときパラメーデースに」と記されていた。アポッローニオスはそれを立ててやり……次のような祈りの言葉を向けた。「パラメーデースよ、かつてそなたがアカイアー人た

---

[53] たとえばエティオピアの裸行者であるテスペシオーンとの論議のなかで、アポッローニオスは「正義」（Δίκη）を「知恵の伴侶」（Σοφίας ὀπαδὸς）と表現している（6.11）。Cf. Kanavou (2018), 54-55.

[54] パラメーデースと「正義」にかんしては、他の登場人物も言及している。イアルカースは「正義に背くことは何もしていない（ἀδικῶν）のにオデュッセウスに敗北した」と（3.22）、またテスペシオーンは「トロイアーのパラメーデースのことやアテーナイのソークラテースのことを想起してみると、人間の世界には正義（δικαιοσύνη）なんてものは存在しないと考えざるをえないだろう、もっとも正義を体現していた（δικαιότατοι）この者たちがもっとも正義に反する行い（ἀδικώτατα）に苦しめられたのだから」と（6.21）述べている。

ち（τοῖς Ἀχαιοῖς）にたいして抱いた怒りを忘れるのだ（ἐκλάθου τῆς μήνιδος）。そして、知恵のある男（σοφοὺς ἄνδρας）もたくさん世に出てくるのを認めてやるのだ」

アポッローニオスは、アキッレウスに言われたように、まずは倒れてしまっていたパラメーデースの像を立て直してやるわけだが、ここで注目したいのは、そのあとのアポッローニオスの祈りの言葉である。アポッローニオスは、パラメーデースにたいし、（再び）「アカイアー人たち」への「怒り」（μήνιδος）を忘れるようにと願う。パラメーデースの「怒り」とは、言うまでもなく、自分を刑死に追い込んだ同輩のオデュッセウスらにたいするものだが、無視してはいけないのは、ここで用いられている μῆνις という語である[55]。これを見た誰もが、『イーリアス』の劈頭（1.1）に置かれた、アキッレウスの「怒り」（μῆνιν ... Ἀχιλῆος）を思い起こすだろう。アポッローニオスをパラメーデースのところへ導いたのはアキッレウスであったわけだが、ギリシアの 2 人の英雄は、今度はアポッローニオスが持ち出した「怒り」という感情によって接続される[56]。アポッローニオスの振舞いから想起されるのは、『イーリアス』第 9 歌で描かれるいわゆる「使節派遣」であろう。ここでは、オデュッセウス、ポイニクス、アイアースが、「怒り」にとらわれ陣屋に引きこもるアキッレウスを戦場に連れ戻すべく説得を試みており、この 3 人の行動は、「怒り」を抱くパラメーデースに話しかけるアポッローニオスとまさに同じである。この 3 人も、「痛ましい憤怒を捨て去れ」（9.260, ἔα ... χόλον θυμαλγέα）（オデュッセウス）、「激しい情動を抑えよ」（9.496, δάμασον θυμὸν μέγαν）（ポイニクス）、「優しい気持ちを持て」（9.639, ἵλαον ἔνθεο θυμόν）（アイアース）というように、言い回しこそ少しずつ異なるものの、「怒りを忘れるのだ」（ἐκλάθου τῆς μήνιδος）とパラメーデースに述べるアポッローニオス同様、命令するかたちで（命令法を用いて）、アキッレウスの「怒り」を放散させようとしている。

アキッレウスはアポッローニオスとのやりとりのなかで、とくにパラメーデースの「怒り」には触れておらず、その意味で、パラメーデースにたいする「怒りを忘れるのだ」というアポッローニオスの願いは、あくまで彼自身がその場で考えたことである。それにたいして、アポッローニオスがパラメーデースに向けて述べたもうひとつの願い、すなわち「知恵のある男（σοφοὺς ἄνδρας）もたくさん世に出てくるのを認めてやるのだ」という願いのほうは、「知恵ある者（σοφοῖς）にとっては知恵ある者（σοφοὺς）が大切である」というアキッレウスの言葉を受けて発されたものだと思われる。アキッレウスによると、パラメーデースは「誰よりも知恵に優れて（σοφώτατος）」いた人物であるということで、アポッローニオスは、パラメーデースのような「知恵のある男（σοφοὺς ἄνδρας）」

[55] Zeitlin (2001), 255 にも指摘があるが、とくに詳細な議論が展開されるわけではない。
[56] ちなみに、アポッローニオスとの会話のなか（4.16）で、アキッレウスは、自分のための追悼儀礼を怠ってきたテッサリア人にたいして「怒る」（μηνίειν）ことはしていない、と述べている。

がこの世に数多く輩出されるよう、彼に協力を求めているように見える。そしてアポッローニオスが願うこの「知恵のある男」の増加は、アキッレウスの思想ともつながるものであることを見逃してはならない。本作のアキッレウスは、先に確認したように、「人との交流（συνουσίαις）に大きな喜びを覚える」人物とされているわけだが、彼は、自分が直接は関与しない、他者同士の「交流」の輪の広がりを期待している人間でもありそうなのだ。今回アキッレウスは、ともに「知恵ある者」であるアポッローニオスとパラメーデースの引き合わせに成功したわけだが、「知恵ある者にとっては知恵ある者が大切である」という彼の信念からもわかるように、「知恵ある者」同士の連携のさらなる拡大も願っていたはずである。アポッローニオスがパラメーデースに求めたことは、アキッレウスが求めていることでもあったということになる。『イーリアス』におけるアキッレウスは、もっぱら「孤独」が強調される一匹狼的キャラクターだが、『テュアナのアポッローニオス』では、話はむしろ逆で、アキッレウスは、人間（厳密には「知恵ある者」）同士の積極的「交流」を重んじる社交的な人物として描かれているのである。

結論

『テュアナのアポッローニオス』における『イーリアス』の参照例として、エウポルボスとアキッレウスの位置づけについて論じてきた。確実に言えるのは、両英雄が『イーリアス』における役回りとは異なった役回りを与えられているということだ。エウポルボスは、『イーリアス』では数いるトロイアー兵の一人に過ぎないが、本作では、アポッローニオスの「転生」の象徴として描かれている。また、アキッレウスは、『イーリアス』では絶対的主人公であるが、本作では、アポッローニオスがパラメーデースと「知恵」を分かち合うための仲介人として振舞っている。

したがって、ピロストラトスの『イーリアス』の利用の仕方は、「独立不羈の男（アキッレウス）の怒りの爆発と鎮静」という本作全体のコンセプトを引き継ぐ類のものではない。『テュアナのアポッローニオス』において、『イーリアス』の物語はバラバラに分解され、選ばれた特定の断片に新たな意味が付与されるというかたちになっている。ただ、このような（当世風に言えば）二次創作のありようをネガティブにとらえる必要はないように思われる。そもそも『テュアナのアポッローニオス』と『イーリアス』は、ジャンル的特性の点でまったく違う文学作品であり、前者が後者の精神を全面的に受け継ぐことはありえない。ピロストラトスは、あくまで「アポッローニオスの称賛」を絶対的な目的としており[57]、エウポルボスもアキッレウスも、その目的に適合するような

[57] ピロストラトスは、序論部の末尾（1.3）で「本書がかの男［＝アポッローニオス］に名誉をもたらすように」（ἐχέτω δὲ ὁ λόγος τῷ τε ἀνδρὶ τιμήν）と述べている。

かたちで持ち込まれている。「転生」と「知恵」は、ともにアポッローニオスを語るうえで欠かせないものだ。

当時の『テュアナのアポッローニオス』の読者（第二次ソフィスト思潮の「教養人」）のなかで『イーリアス』を知らない者はいなかったはずだが、彼らは、ホメーロスのキャラクターが生まれ変わるさまを見て驚くと同時に、第二次ソフィスト思潮の親玉であるピロストラトスの洗練された知的遊戯を大いに楽しんだことだろう。

参考文献

【一次資料】

Boter, Herald P. ed. (2022) *Flavius Philostratus Vita Apollonii Tyanei* (Berlin).

Follet, Simone. ed. (2018) *Philostrate Sur les héros* (Paris).

Monro, David B. and Thomas W. Allen eds. (1902) *Homeri opera*, I (Oxford).

Monro, David B. and Thomas W. Allen eds. (1902) *Homeri opera*, II (Oxford).

【二次資料】

Anderson, Graham. (1989) 'The *Pepaideumenos* in Action: Sophists and Their Outlook in the Early Empire' (*ANRW* II 33.1: 79-208).

——. (1993) *The Second Sophistic: A Cultural Phenomenon in the Roman Empire* (London).

Belloni, Luigi. (1980) 'Aspetti dell'antica σοφία in Apollonio di Tiana' (*Aevum* 54: 140-149).

Billault, Alain. (2000) *L'univers de Philostrate* (Brussels).

Bouquiaux-Simon, Odette. (1968) *Les lectures homériques de Lucien* (Brussels).

Bowie, Ewen. (2009) 'Quotation of Earlier Texts in ΤΑ ΕΣ ΤΟΝ ΤΥΑΝΕΑ ΑΠΟΛΛΩΝΙΟΝ' in Kristoffel Demoen and Danny Praet eds., *Theios Sophistes: Essays on Flavius Philostratus'* Vita Apollonii (Leiden), 57-73.

Burgess, Jonathan S. (2001) *The Tradition of the Trojan War in Homer and the Epic Cycle* (Baltimore).

——. (2009) *The Death and Afterlife of Achilles* (Baltimore).

Eshleman, Kendra. (2012) *The Social World of Intellectuals in the Roman Empire: Sophists, Philosophers, and Christians* (Cambridge).

Flinterman, Jaap-Jan. (2009) ''The Ancestor of My Wisdom': Pythagoras and Pythagoreanism in *Life of Apollonius*' in Ewen Bowie and Jaś Elsner eds., *Philostratus* (Cambridge), 155-175.

Greensmith, Emma. (2020) *The Resurrection of Homer in Imperial Greek Epic: Quintus Smyrnaeus'* Posthomerica *and the Poetics of Impersonation* (Cambridge).

Grossardt, Peter. (2009) 'How to Become a Poet? Homer and Apollonius Visit the Mound of Achilles' in Kristoffel Demoen and Danny Praet eds., *Theios Sophistes: Essays on Flavius Philostratus'* Vita Apollonii (Leiden), 75-94.

Hägg, Tomas. (2012) *The Art of Biography in Antiquity* (Cambridge).

Hodkinson, Owen. (2011) *Authority and Tradition in Philostratus'* Heroikos (Lecce).

Hunter, Richard. (2004) 'Homer and Greek Literature' in Robert Fowler ed., *The Cambridge Companion to Homer* (Cambridge), 235-253.

Janko, Richard. (1994) *The Iliad: A Commentary, Volume IV (Books 13-16)* (Cambridge).

Kanavou, Nikoletta. (2018) *Philostratos'* Life of Apollonios of Tyana *and its Literary Context* (Munich).

Katsumata, Yasuhiro. (2015) 'Travel and the Greek σοφία: A Study of the Phoenician Merchant in Philostratus' *Heroicus*' in *Conference Proceedings Sapience Ubique Civis (Szeged, Hungary, 28-30 August 2013)*, 43-64.

Kim, Laurence. (2010) *Homer between History and Fiction in Imperial Greek Literature* (Cambridge).

——. (2022) 'Homer in the Second Sophistic' in Christina Panagiota Manolea ed., *Brill' s Companion to the Reception of Homer from the Hellenistic Age to Late Antiquity* (Leiden), 164-188.

Kindstrand, Jan Fredrik. (1973) *Homer in der zweiten Sophistik* (Uppsala).

Praet, Danny, Kristoffel Demoen, and Wannes Gyselinck. (2011) 'Domitian and Pentheus, Apollonius and Dionysos: Echoes of Homer and of Euripides' *Bacchae* in Philostratus' *Vita Apollonii*' (*Latomus* 70: 1058-1067).

Riedweg, Christoph. (2005) *Pythagoras: His Life, Teaching, and Influence*, Steven Rendall trans. (Ithaca).

Robiano, Patrick. (2016) 'The *Apologia* as a *mise-en-abyme* in Philostratus' *Life of Apollonius of Tyana*' in Koen De Temmerman and Kristoffel Demoen eds., *Writing Biography in Greece and Rome: Narrative Technique and Fictionalization* (Cambridge), 97-116.

van Dijk, Gert-Jan. (2009) 'The Odyssey of Apollonius: An Intertextual Paradigm' in Ewen Bowie and Jaś Elsner eds., *Philostratus* (Cambridge), 176-202.

Whitmarsh, Tim. (2005) *The Second Sophistic* (Oxford).

Zeitlin, Froma I. (2001) 'Visions and Revisions of Homer' in Simon Goldhill ed., *Being Greek under Rome: Cultural Identity, the Second Sophistic and the Development of Empire* (Cambridge), 195-266.

勝又泰洋（2023）「ピロストラトス『テュアナのアポッローニオス』におけるダミスの人物造型―ギリシア恋愛小説の「男主人公の友人」と比較して」『文芸学研究』第 26 号、27～49 頁。